

# えんちょう通信

No.98

令和5年5月29日  
福島市立清水幼稚園  
発行者 佐藤一男

## ヘラクレスオオカブトがやってきた

先週の5月25日(木)、清水幼稚園にヘラクレスオオカブトが届きました。

その前の週に、幼稚園に用事があった来てくださった方が、生き物が大好きな方で、その方に、主任の先生が「クワガタムシをつかまえてきて、子どもたちに見せてあげたいんです。」というような話をしていたら、その方が「それじゃ、うちで飼っているヘラクレスオオカブトを、もってきてあげますよ。」と言ってくくださったのです。テレビや図鑑でしか見たことがなかったので、驚いてしまいました。

次の週に、その方が、生きていた大きなヘラクレスオオカブトをもってきてくださいました。

本物のヘラクレスオオカブトを見た子どもたちは、「大きいー。」「動いたよ!」「背中が金色だ!ロボットみたいだ!」と大騒ぎです。

するとそこに、小さな飼育ケースを持った男の子が駆けてきました。「これ、僕のクワガタだよ。」とヘラクレスオオカブトを持ってきてくれた方に、自分の自慢のクワガタムシを見せています。

そばにいたやはり虫好きの別の子が、「これ、『ヘラクレス・リッキー』ですか?」ときくと、「これはね、『ヘラクレス・ヘラクレス』っていうんだよ。」と教えてもらって、とてもうれしそうです。ヘラクレスオオカブトというのは何種類もあって、その中で一番大きいのをそういうのだそうです。

子どもたちは、興味・関心を持ったこと、自分が好きなことは、どんどん学んでいきます。

その方が帰った後、そのクワガタが大好きな男の子が、「ぼく、大きくなったら、大きなカブトムシをつかまえて、あの人にあげるんだ・・・。」と言っていたと、主任の先生から聞きました。なんだか涙が出そうになります。

子どもたちは、ヘラクレスオオカブトは、もちろんすごいなと思って見っていますが、それ以上にそのヘラクレスオオカブトを飼っているその人を、「すごいな。いいな・・・」と憧れをもって見ているのだと思います。「ぼくも、こういう人になりたいな・・・」と思ったのかもしれません。そうして子どもたちの「学び」は、さらに広がっていきます。この子は、大人になっても幼稚園のときにヘラクレスオオカブトを持ってきてくれた人がいたことを、ずっと忘れないのではないのでしょうか。

教育学者の汐見稔幸先生は、「子どもたちの可能性をリスペクトして、教師や親が必死になって、子どもたちがあっと驚くことを用意してあげてほしい。」「子どもたちが感動し面白がっている、その事実謙虚であればいいと思います。」「そして、『子どもって面白いな』と思いつけていることが、子どもの教育を支える教師の仕事であり、親の役目なのです。」と書いています。(『教えから学びへ』河出書房新社 2021)

子どもたちが、びっくりしたり、喜んだりするのを面白がってくださる方がたくさん来てくれる「開かれた幼稚園」にしたいなど、いつも思っています。

